文化

天幕に大夕立の来て

吉野群峯踏破記（その二）

なら民俗通信 274

西村　博美

意気盛ん、採集活動も

▼夕立とウサギコウモリ

さて、大正四（一九一五）年七月二十七日、吉野群峯全踏破をめざした一行は、吉野山を発（た）って、「（先達（せんだつ）の）法螺貝（ほらがい）吹奏につれて、錫杖（しゃくじょう）打振り鈴の響きに行進する」（『吉野群峯』）。

「しかし、早くも仲間内に疲労の声が聞こえ始めた」と、森口奈良吉は記している。おまけに天候は、白雨の篠（しの）つく空模様から、たちまち周囲は雲海にとざされて、大夕立が来る。修験者や強力（ごうりき）のほか、実業家や教員などからなる一行の体力はいましも、気力だけはなかなか盛んで、コマドリの声に立ち止まって句吟する人もある。

力餅（ちからもち）や葛湯（くずゆ）に慰められて、雨のなかを「丹前を端折（はしょり）て素足に草鞋のまゝ東の覗（のぞき）、蟻（あり）の戸渡り、平等石を廻（めぐっ）て美はしき檜（ひのき）の自然林中に出る」。

この日の宿は、竹林院。献立は、高野豆腐やアブラゲ、素麺（そうめん）の精進料理だが、酒にビールは飲み放第と記録者の森口に、ご満悦の様子がうかがえる。当夜の話題は、大峯山寺本堂で、生物学専攻の西山熊夫ら「採集隊」が捕獲したウサギコウモリに沸いた、ともある。

▼ナメクジとコマドリ

西山は、この登山行でチネズミ、ヒキガエル、ハタケドジョウなどの珍種を見つけて、「これらは仙台と日光で捕獲されたことがあるのみ」と報告をしている（前掲書併載の「大和アルプス并に大台ケ原昆虫採集雑記」）。

翌二十八日、一行は奥駆（おくが）けの道を往（ゆ）く。龍ケ嶽（だけ）、大普賢（だいふげん）嶽を経て、国見嶽に攀（よ）じ上り、行者還（がえり）の山腹に、天幕を張って野営した。突然の夕立やテントにナメクジの襲来あるも、夜は晴れわたる空に月を眺めて、団長用意の「明治屋製フランスパンにハム、豚」。昨夜の精進とは打って変わって豪勢のうえ、「とにかく飲むだけは一同をして不足ない」。

二十九日、彌山（みせん）から仏経ケ嶽へ。ここでも西山は、コマドリの巣の中に親指大の琉璃（るり）色の卵を三個を見つけているが、何より特記すべきは、この短期日に総計三九五種の昆虫を採取し、分類し、目録を記していることに尽きる。当夜も「楊枝の宿」にテント泊。携帯食に麦酒（ビール）にウイスキー。「得意の謡曲（ようきょく）を唸るひとあり、粋士の俗謡あり気焔（きえん）万状」（森口）。

▼伊藤忠兵衛と岸田日出男

三十日、一行は木の根岩角にかじりついて釈迦嶽山上に達した。「（孔雀嶽の）脊梁（せきりょう）に伊藤君は薬草を発見する」とあるのは、二代・伊藤忠兵衛、当時二十九歳。出発に当たって一行を吉野駅頭に出迎えた永田藤兵衛（林業家、吉野銀行頭取）の女婿である。二十七日の大峯山寺本堂前で撮られた写真中に、若々しい伊藤の姿が写っている。

翌々日（三十一日）伊藤は、大台への道筋で足指を負傷するが、「押して登山せしは勇気に感ずべしだ」と森口に褒（ほ）められている。ちなみに森口奈良吉、当時四十歳。

若さといえば、二十五歳の岸田日出男がいる。大淀町（奈良県）の岸田の自宅から、およそ百年前の映像フィルムが見つかったという記事が、つい先日の新聞に載った（朝日新聞奈良版、四月五日）。そこには、当時（一九二三年）の内務省が撮った大峯奥駆道の山々や、大台ケ原の風景が写されているという。それはまさに、いまここで追っている「踏破行」と重なる。

郡役場の農林技師であった岸田は、吉野熊野国立公園指定に向けて奔走した（三六年に指定）。岸田は、地元の吉野群山はもとより、かねてから憧憬（あこがれ）をいだいていた熊野の海岸美と渓谷美をあわせて、吉野・熊野を一体とした公園指定を望んでいた（『吉野群山』、郷土研究社、一九三六年）。

同書の共著者、笹谷良造は「岸田は、吉野郡（東吉野村）に生れて幼年の頃より目にし耳に聞くものは、常に吉野の山々であった」と記している。

▼前鬼の宿

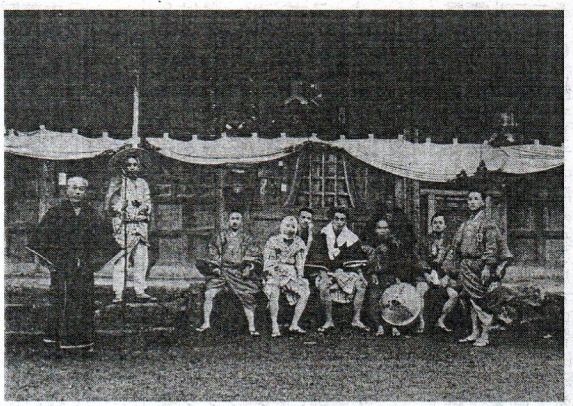
三十日、地蔵岳、二ツ石を経て、森本坊（五鬼継）と小中坊（五鬼助）に分宿。仏教民俗学者の五来重によれば、前鬼（ぜんき）には役行者（えんのぎょうじゃ）の従者の前鬼後鬼という夫婦の鬼の子孫の五家が住んで前鬼村をつくり、大峯入峯（にゅうぶ）の先達や宿坊をしてきたとされる（『山の宗教　修験道』、淡交社、一九九七年）。

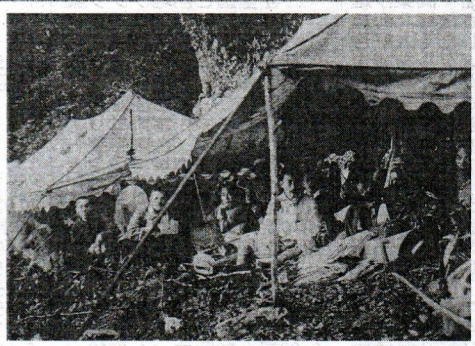
宿は、大日岳が雲間にそびえ前牛山の中腹標高八三九メートルの盆地にある。山また山を越えてきた一行は、ここ三日ほど行者のほかに出会う人もなかった恋しさにか、「若き人々は、森本坊の浅子花子の両嬢を見て物珍しさうに話題を作つて居る」と、森口の筆も心なしかしんみりとしている。

明日は、北山川に沿って大台ケ原へと（以下、次稿）。

（にしむら・ひろみ＝詩人、奈良民俗文化研究所研究員）

＝次回は6月1日付掲載＝





大峯山寺本堂にて。前列右より岸田、大村、鳥谷（先達）、伊藤、阪本、森口（写真上）と、行者還での幕営（写真下、『吉野群峯写真帳』）